《研究ノート》

マックス プランク ヨーロッパ 法史
研究所とその研究課題 (六)

勝 田 有 恒

四 法律学文献の諸類型について

近世私法史ハンドブック(比較近世私法史の史料と文献)——最近の知らせによると今秋公刊の予定——の編纂過程で、特に力点が置かれていたのが、文献及び判決録の類型論であった。恐らく近々刊行されるこのハンドブックの特色となるべきものであり、編纂の長たるコーイングもかねこれを重視しており、六八年の研究所顧問会研究報告会で、「市民法学及びローマ法の現代的慣用における法学文献の諸類型」をテーマに選んでいる。勿論、このハンドブック全体を通じて、文献類型論が適宜編入されてゆくのであるが、この会では、註釈学派、註釈学派、現代的慣用(ローマ法継受期も含む)の三つの時代に区分し、研究所員のペーターワイマール、ノルベルトホルン、エルンストホルトヘーファー、所外研究員アレフレッドセルナー教授の四名が報告を行った。これらの報告は、従来

の研究状況をふまえつつも、最近時の史料の発見に基づく分析結果も採り入れ、従来皆無に近かった総括的な文献類型論を展開しており、研究としての価値も高いものである。四氏の報告は研究所機関誌 *Ius Commune* 第二卷(一九六九)に論文の形にまとめられている。

本稿ではこれらの論文によりつつ、当研究会の席上におけるモーンハウプトによるプロトコールも参照しながら、簡単な紹介をするにとどめるが、前述したように、これらの報告はただ文献類型を機械的に並べるといったものでなく、法史学や法学方法論などの見地からみて多くの興味ある問題を含んでおり、折をみて稿をあらためる必要もあらうかと思う。

席上まず所長コーイングが、研究所の当面の課題であるハンドブック編集に関連して、文献類型の形成と判決録の類型化の二つの重要問題があることを指摘し、そのうちから当日のテーマが選ばれたむねの説明があり、こうして試みの一つとして、かつてエミールゼッケル *Emil Zitelmann* が文献を法学者ではなく、文献のタイプによって分類しようとした点に触れ、時代範囲が註釈学派から現代的慣用までになっているのは、註釈学派、註釈学派、現代的慣用の三つの時代が、それぞれ内的関連を有し、それぞれの時代に特定の文献類型が生まれ、それが新しい形式へと発展せしめられるという見地に立ったうえでことであると説明した。

一 註釈学派の時代

第一の報告者はワイマールで、題目は「註釈学派の法学文

「文献」であった。(論文題名は「註釈学派期の市民法文学文献と法学教育の方法」となっている。)以下彼の報告要旨をたどることにする。

ヨーロッパ市民法文学の文献には実に様々な種類があるが、しかしそれらは全体としてのまとまりをみせている。つまり、まずポロニーヤで法学教育が生まれ、法文学文献はそれに密接な関係をもち、しかもポロニーヤから全ヨーロッパへと普及したためである。したがって法学教育のやり方についての見識をもつことによつて、文献の統一性や個々の文献類型を把握することが出来る。これがいわば、基本的な立場であつて、当然のことながら、一二世紀にポロニーヤで法学者達が法学研究を開始してから、ユスチニアヌスの法書の解明のために編集した註釈集成 *Glossenapparat* を理解する場合にも妥当するのである。すなわち註釈集成は法学の授業内容を文章の形に変形したもので、別のいい方をすれば講義の方法上の要素と註釈集成の方法上の要素が一致したものと考えられるからである。講義と註釈集成との構造を理解することは、他の文献類型の把握にも役立つのである。すなわち法文学文献は、講義と註釈それぞれの要素が様々に組み合されて成り立っており、すべての文献類型は、授業方法に極めて忠実な要素類型 *Elementartyp* か、註釈方法から派生する註釈類型 *Glossenartyp* かのいずれかに該当する。

サヴィニーは註釈 *Glosse* を定義して、それは法学者が、保存、写本、普及などを意識して原典に書き込んだものであり、註釈と講義との共通点は、ユスチニアヌスの法書の解釈を対象

としたことである、と述べているが、この見解によると、個々の註釈は註釈者の労作であつて、幾世代にもわたつて二〇〇年の間にひたすら註釈を行い、章から巻、そして最終的にアクルシウスにより法書全体についての註釈がまとめられるに至るといふことになる。これはいわば支配的な説となつてはいるが、サヴィニー以後、比較的古い時代の註釈も発見された今日、修正が必要となつてきている。授業方法と註釈との間の密接な関連、これがサヴィニー批判にも繋がるのであるが、それでは、授業方法は具体的にどのようなものであつたのか、またそれがどのように註釈集成へと投影されたのであろうか。

法学授業の方法の理想的な姿として、報告者ワイマールは、一二世紀末のバシミアヌス *Johannes Bassianus* と一二世紀中期のバルデアイーニの弟子 教会法学者ホステイエンヌス *Hosteniensis* (*Henricus de Segusio*) およびテランティヌスやバルデアイーニの弟子ベレグロッシ *Pietro Peregrossi* などの記述によりつづつ、次の七段階を提示する。

- (A) 章 *titulus* (例えば *D. 1. 5 = II. de statu hominum*) につづつこの総合的な説明。 *Dicam summas cuiusque tituli, antequam accedam ad literam.* (*Peregrossi*)
- (B) 個々の法文 (例えば *D. 1. 5. 4 = II. de statu. 1. Iheritas.*) を規定 (例えば *C. 5. 6. 3 = C. de interdicto. 1. cum*) の本質的内容のまとめ。 *Casum simpliciter et nude ponimus.* (*Bassianus*)
- (C) 簡単な説明を伴う原典の読み上げ。 *Secundo legendo*

litteram et exponendo et etiam construendo, si
difficilis appareat. (Hostiensis)

(D) 類似箇所と対立箇所との整理及び矛盾解決。Tertio inducendo similia. Quarto inducendo contraria et soluendo et distinguendo. (Hostiensis)

(E) 一般的な法思考の抽出。Argumenta ad causas de facto annotamus, que loci generales vel generalia vel vulgariter brocarda appellantur. (Bassianus)

(F) 区別の形式化。……et distinctiones. (Peregrini)

(G) 事案の解決ならぬ法律問題の論究。Ad ultimum questiones mouere et discutere cosuenimus, vel statim in lectione vel in uesperis pro sui difficultate prolixiori disputationi reservare differendo. (Bassianus)

ホステイ、エンシスもペレグロッシも、明白に法律問題の解決に言及している。ここでは、原典においては解決されていないが、問題の性質上原典との関連において論究されるもの、と解すべきである。事案解決の議論は、通常の授業において「論証」の形で行われていたが、その後、特殊な授業として *disputatio* が設けられた。これは正規の授業のほかに、毎晩とか週末に開講された。この *disputatio* は恐らく「実務的討論」とでもいふべきものであり、最近の研究がその実態を明らかにしている。

この七つの段階一つ一つに照応して、様々な註釈集成が生まれて来るのであるが、あるものは記述的の原典解説であり、また

あるものは原典の法的内容に関する議論なのである。すなわち、

(a) 「章の手引き」 *introductiones titulorum* これは聴

講者に当該の章で扱われている法域を紹介するためのものである。その方法には種々のものがあり、章名の概念規定であったり、前後の各章との関係やそれらの相違点に及ぶものがある。従来はその章の内容紹介の面が軽視され、後者の「章の連関」が重視されたため、この種の註釈は *continuatio titulorum* と名付けられていたが、ワイマーはこれにかえて「章の手引き」という名称を提案している。

(b) 「法文の手引き」 *introductiones legum* 「章の手引き」と同様の機能をもつもので、アクルシウス前の註釈にすでに見出される。(a)と(b)は、「手引き註釈」の範疇に入れられる。

(c) 「説明註釈」 *ekklärende Glossen* 大部分の註釈はこれに属する。原典の中に原典法文の意味を害なわないように挿入されているが、原文をとってしまうと全く理解することが出来ない。

従来よくいわれた行間註釈 *Interlinearglossen* と欄外註釈 *Marginalglossen* の区別は註釈自体の性格上の分類法としては無意味であるし、またこの「説明註釈」を、言語学的なものと法律学的なものに分類することも実際には極めて難しい。この類型は原典批判から難解な語句や文章のバラフレーズ、抽象的な概念や思考の具体化、さらに所

与の解決に独自の根拠を与えたり、また類似の事実関係を解決するための原典の説明や要約にまで及ぶ。

(d) 「類似・対立点引用註釈」より高度の解釈段階の註釈である。アクルシウス前にみられるのは、原典の類似箇所と対立箇所との集成で、古いものほど長い引用文が目につく。この類型は矛盾解決 *solutioes contrarium* に結びつくが、これは原典には矛盾がないという当時の理論上の要請にみあうものであり、同時にまた「理論的法律設問」 *quaestiones legitinae* の原型でもあった。

アウテンティカ *Authentica* も類似的な註釈と考えられる。これはガルネリウス(イルネリウス)以降みられるが、古い勅法を變更した新勅法 *Novella* を抜き出して整理し、勅法集 *Codex* や三部書 *Tres libri* や法学提要 *Institutiones* に註釈として付記したものであるが、これは註釈集成のなかでも特異の位置にあり、独特の発展過程をたどる。

(e) 「注意書き」 *Notabilien* 最も古い註釈のなかにすでに存在しており、後に *brocardica* となるものである。この類型では単一もしくは一般化が可能な法思考が問題となる。これは授業中の討論とか、実務的事案解決のために、論拠 *argumenta* として原典から抽出されるのだが、まさに古代、中世修辞学での *sedes argumentorum* とか *tótop* に相当するものである。後に現われる *brocardica* (「対立論証集」) では、対立的な二つの議論が組み合わされてい

る。

(f) 「区別論集」 *distinctiones* 最も古い註釈にもすでにみられるもので、これはまさに中世的思考の一原型そのものであって、アポリアや矛盾の解決に役立てられている。すでに記したように、「矛盾解決」や「対立論証集」はもとよりのこと、「手引き註釈」にさえ、それが対立点を取り扱う場合には、「区別」の性格を帯びている。しかし、この「区別論」類型で問題とするのは、全く独立した区別なのである。すなわち、原典にある上位概念を、対立的な特別な指標を引き合いに出すことによって、諸下位概念に分解するのであるが、この方法で、当該の素材を総括し、説明してゆく。

(g) 「実務のための討議設問集」 *quaestiones disputatae* 一二世紀の末期になってはじめてあらわれる。設問を解くには多くの論証が必要であるから、「設問」は一見、註釈ではなく、討論の報告書ともみえ、かつてはそのように考えられていた。

アクルシウス前の様々なタイプの無数の註釈は、実は註釈者がただだてもなく、その学識を書きつらねていったのではない。ユスチニアヌスの法書全体を関連的に説明することが核心となっていたし、法学教育の要領に従って註釈を記していた。この意味でワイマールをはじめ最近のロマニステンは、単なる註釈という用語のほかに、註釈集成 *Glossenapparat* という語を用いるのである。これが生まれたのはポローニャの黄金時代

であった。しかもこの註釈集成は講義案でも講義録でもなく、授業方法に従いつつ、鋭い洞察力と周到な配慮のもとに書き記されたものであった。勿論、講義録 *Lecturae reportae* もあるにはあったが、初期の段階については未だに知られていない。最も古いもので、パッサヌスとその弟子によるものである。

註釈集成の形式は、すでに一二世紀の前半に出来上っていた。サヴィニーによると、その嚆矢はアン・アゾ (ca. 1150—ca. 1230) であるが、今日ガルネリウス (ca. 1050—ca. 1130) の *Digestum vetus*、マルティヌス・Martinus († 1166) の法学提要 *Digestum novum* についての註釈集成が知られている。中世を問わず多くの時代に、法律家は原典の行間や欄外に自己の見解や他文献からの引用などを書き込み、自分の印章を添えることが多い。こうした書き込みが、原典全体の連統的な解説や全体の構造を提示するという意味をもたない場合は、それらはまとまりを持たず、したがって註釈集成ではない。単なる註釈そのものは、中世の学問一般にみられるものであり、決して法律学特有のものでもないのである。

さて時代を下るにしたがって、註釈集成そのものにも変化がみられる。個々の註釈一つ一つをとってみれば、それは古くからの註釈類型を受け継いでおり、本質的には変っていない。しかしながら、「説明註釈」に「論証」「反証」「引用」「解決」が付加され、「設問」とか「区別」が増加し、一般的に註釈集成の規模は増大してゆき、古い註釈類型相互間の差異は薄れてゆく。ここに古い類型にかわって、「論証的註釈」という統一的

な新しい類型が登場することになる。この新しいタイプでは最早原典法文の末尾ではなく、各語句ごとに註釈が付され、既存の註釈も簡略化される。このためスペースが節約され、法律問題についての説明が見出し易くなってくる。この新しい手法の具体例は、アゾの学説類集大註釈集成 *apparatus maiores ad Digestum* に見えて見ることが出来る。

こうした註釈類型の変化には、それに照応する当然授業方法の変化が予想される。授業面での変化を要約すると、(い) 最初は、かの七段階の講義方法において、付加的説明が重視され、(ろ) 「設問」が現われたり、「論証」の深化にみるようなより高度の積義がなされたりして、要素類型と註釈類型の平均化や発展への分岐がみられるようになる。(は) 記述の面では、註釈技術は以前と同様であるが、他方註釈類型間の差異は減少する。そして後数世紀にわたって支配的となる「標準註釈書」*glossa ordinaria* という形式の新しい類型が発展をみる。個々の要素類型と註釈類型は残存しているが、今や原典の当該部分と関連するものの、原典にはないような解説も註釈の構成部分となってゆく。このタイプは講義やとくに註解学派の「註解」*commentaria* において支配的になる。さて個々の具体的な文獻類型の発展をみると次のようになる。

(a) 「章の手引き」からは、「章の総合」*summae titulorum* 例として *summae Institutionum*, *summae Codicis*, *Trium librorum*, *summa Authentici* などが発展する。

またこの「章総合」が章の区分を超越して、他の分割のもの

とに叙述を行うようになる。Tractatus questionum; distinctionum とした「論究」tractatus となる。

(b) 「法文の手引き」からは、原典法文の順序に従った「ケース集」casus、例えば Casus Codicis が生まれ、更に発展して Commentum (事案集) となる。これは原典を順を追って、原典をパラフレーズすることにより問題を全体的な法律論として説明してゆくものである。

(c) 「説明註釈」からの直接的な派生物はないが、二つのものを挙げてみようと思われる。第一は「定義集」Definitionsammlung と「語彙集」Vokabulation とであり、第二は「法律問題集」ともいうべき諸々の類型が混合されたかたちのものである。

(d) 「矛盾解決」は「理論的法設問」の原型とみなされる。

(e) 「注意書き」や「対立論証集」は、あるものは未整理であり、あるものは原典の順序に従って体系化される。

(f) 「区別論集」はすでに四博士の時代からみられる。

(g) 「実務のための討議設問集」は特殊な地位にある。そもそもこれは講義とは分離されたかたちで (disputatio によって) 生まれたものであり、時代的には一二世紀末にあらわれている。しかもこれを註釈集成の一つと考えるのは、特殊なつまり実務を意識した授業目的に役立てられていた。これを直接的に実務に応用したのが註解学派の Consilia 「助言集」「法鑑定集」である。しかもこの註釈学派の時

代にも Consilia が発見されている。註釈学派が理論にのみ興味を示していたという通説は誤っているのではないかと。

このようにワイマールは註釈学派期の文献類型を提示するが、その具体例についてはハンドブックが公刊されればより詳細に知ることが出来る。最後にこの類型論に関して、二、三気のついた点を指摘しておく。

第一に従来は「註釈」という語で漠然としか示されなかったものが、法学教育方法との関連で綿密に整理されたことは極めて有益である。七段階の教育方法は、法学教育方法それ自体の問題としても興味深いし、また当時の教育の実態を想定するうえでも便利である。今や近世ドイツでの暗誦用対聯によることなく、比較的に明確に法学教授法を把握出来るわけである。さらにこの七段階の法学教育方法と厳密に言えば不即不離の関係に立つと考えられる Glosensnapparat の提示も注目すべきものであろう。筆者は適当な訳語を見出し得ず、仮に註釈集成としたが、原典に展開される法律論の一部として、註釈を位置づけたことは意義深いものといえる。

第二はいささか個人的興味も手伝うが、註釈学派といえども実務とは決して無関係ではないのではないかと、非常に控えめなワイマールの提案が興味をひく。この問題は、教育方法の第七段階の (G) で示される要素類型と関連するものであり、文献類型でみれば (g) 及び (g') にあらわれている。史料は一二世紀末のものであり、たしかにこれが始祖ガルネリウスの

時代から存在したかについては論じられていないから、これをもって註釈学派の時代全体を規定するのは早計であるとの批判もあろうが、ワイマールの指摘は、従来の註釈学派にかかわる通説のもつ一種の物足りなさを思うとき、有力な指摘として今後その発展が期待される。また他方アゾの時代に註釈学派が本

質的な変化を遂げるという推定も出来るわけで、従来の註釈学派と註解学派との区分自体も再検討されることになるかもしれない。

(一橋大学助教授)